

時代に足跡を記した大先輩・その7

日本のテレビ一号機を開発した先輩

愛と創造の技術者・笹尾 三郎

昭和3年電気科卒

1. 生い立ちと人柄

笹尾三郎氏は明治44年生れ、南秋田郡五城目町出身。幼少の頃、近所の鍛冶屋の仕事を見るのが好きだったと言われる。大正14年秋田県立秋田工業学校入学。昭和3年浜松高等工業学校(現静岡大学)入学、テレビ研究者高柳健次郎博士の第一門下生となった。

昭和5年、昭和天皇が浜松高等工業で実験を御覧の際に「賜天覧の字」「イの字」「人物画像」のテレビジョン実験で高柳博士の助手を務めたのが笹尾三郎氏であった。

昭和6年、早川金属研究所(後の早川電機(株)、現在のシャープ(株))に嘱望され、初の学卒技術者として入社し、創業者早川徳次氏を製品開発の立場で支える技術幹部として勤務。就職して最初に早川社長に頼んだことは「IRE(米・電子学会誌)を購入して下さい。米国の最新技術が載っている本でテレビ研究では欠かせない本です」。以後、常にこの本には目を通し研究に専念した。当時はまだラジオが盛んになりだした時で、特に性能向上、新製品開発に取り組まれた。

その勤務ぶりは当時の部下であった人の言葉によると「誠に厳しい上司で、仕事一途の方、物事を言い出したら実行してみないと納まらない人であった。電気屋でありながら機械工作で旋盤でも使わせて右に出るものはいない程、器用な面もあり厳しさの裏に愛情もあって、誰言うともなくつけた『オッサン』という愛称そのものでした。」

竹刀を持っての部内巡視、声も大きく、どしどしと指導する風景が、氏ご自慢の1m程の計算尺やプランメータ(面積計)を駆使した設計計算の見事さとともに語られている。

後年の初代関西支部長として温厚篤実な笹尾さんからは、想像できないことであった。

ラジオの商品開発では多くの実験測定を必要とするが、その評価用の、さまざまな測定器を開発することが得意な人で、オッシロやブリッジを除けば笹尾さんのユニークなアイデアによる自社開発の測定器が殆どだったと言われている。製品を作る前に測定手段を作ることは高品質の優良品生産の鉄則であることを当時、既に実践されていたことに驚く。

昭和16年開戦、会社存続のため軍需品開発に挑戦し、当時もっとも技術的に困難な周波数計開発を軍から指定され、見事に開発完成し軍からの信頼を得た。昭和20年8月終戦後の日本の企業は電気関係に限らず極悪の状態であったがここでもまた、パン焼機、停電灯、電気ライターなどの独創製品でしのいだ。

2. 業績—テレビ開発と新製品開発の数々

終戦は劣悪な企業経営の環境を招いたが、反面、電波の夜明けをもたらした。昭和26年、ラジオの民間放送開始、同じく講和条約締結の頃にテレビ開発の社命が下りた。実に笹尾さんが入社してから20年後のことであった。

その間、常に世界の研究開発の情報を入手し、読みこなしながらテレビ開発の社命を待った態度と行動には、秋田県人特有の「粘りと頑固さ」と秋工の伝統「質実剛健」を強く感じる。

笹尾さんはテレビ開発の「GOサイン」が出る前から頭の中にあつたシャープモノスコープとパターン図を画用紙いっぱい書き、ブラウン管メーカーに試作を依頼していた。仕事にゆきづまると、GHQの図書館に行き参考書を調査した。受像機の試作で、次の三つの部品が極めて重要であることを突きとめる。

1.チューナー 2.偏向コイル 3.フライバックトランス

特に偏向コイルはブラウン管の電子線を偏向させるコイルで全く新製品。これに取り組み、見事コサイン巻きで画面の歪みを解消する笹尾氏の様子が、NHK プロジェクトXに放映され感動をよんだ。「日本のテレビ開発事業化は担当メーカーが横並びでスタートしたがブラウン管の大きさ、チューナーのチャンネル数などの決定では、企業間の競争の面

と同窓会(浜松高等工業)での情報交換の面とをうまく調整した話を秋工同窓会関西支部の関係者に教訓として教えていただいた。

昭和28年1月、笹尾さんが中心に開発したテレビは、日本のテレビ第一号機として、175,000円の定価(当時公務員の初任給8,700円)で発売された。テレビ発売に至るまでの重要部品の開発に関する取組には幾多の物語があり、口癖の「おい、何が問題だ、その問題に徹底して取り組めば神様が解決してくれるよ!」という姿勢で取り組んだ。

その結果

昭和28年 日本のテレビ一号機、完成販売

昭和35年 カラーテレビ開発

昭和37年 電子レンジ開発

昭和37年 X線カラーテレビ開発

(日刊工業新聞社表彰、今日のX線CTの基礎)

昭和44年 常務取締役役に就任

という輝かしい業績を残した。

笹尾さんが開発した製品の数々は、一企業の発展と技術的な基礎を築いたばかりではなく、日本の産業界の活性化をもたらすとともに、今日に至る家庭電化生活の普及に大きな貢献をしたと言える。近年になってテレビ朝日や、NHKがその業績にスポットライトを当てていることは、漸くにしてその功績を社会が認めた証拠であると思う。

3. 愛と夢を与える人—思い出の記

笹尾さんの奥様が病氣療養され入院している時、外のきれいな空気を吸いたいという懇願に、3ヶ月で空気清浄機を作ったという。当時の医療機器にカラーテレビの技術を応用して、X線カラーテレビを開発し、今日のX線CTの基礎をも作った。液晶開発への取組に当たっても、理論性と将来性の洞察に基づき、強い指導と支持を部下たちに示したという。退職後は福祉関係に奉仕した。

秋工同窓会関西支部関係者が笹尾さんに初めてお会いしたのは昭和34年、初期の同窓会の頃で、関西の同窓会活動中断の期間を経て、昭和56年、支部再興の目的のもとに再会した。

支部関係者が笹尾さんから受けたものは慈愛に満ちた支部活動へのご尽力と、ご指導の数々であった。再興支部初代支部長として次の三つの条件を出された。

①会員の名簿を作り、毎年更新すること

②会費制で運営すること

③名簿を活用し、異業種交流を促進すること

これらの教えを忠実に守り、支部再興20周年を一昨年、実施した。支部再興に当たり、自らタイプライターで名簿を作成し、支部旗と花園用のラグビー応援旗をデザインし、本部同窓会80周年記念式にはその運営内容について再三の要望を提出した当時から彷彿と思い出される。打ち合わせのあと、笹尾さんの弾くア コーディオンで秋工校歌を歌いあったことなど懐かしい思い出である。初心貫徹に純粋であり、自らの思いを実行し続け、その過程で大望もかない、受け継ぐ者も慕い集う。笹尾さんは秋工が誇って良い傑出した人だったと思う。昭和62年逝去された。享年76才。

最後に笹尾さんが書かれた文章を引用させていただく。

我々後輩に示された、愛と創造の技術者としての哲学であると考えている。

私が最も感動したことを書きます。

帝国ホテル富士の間で高柳先生の文化功労者受賞祝賀会が盛大に行われました。先生は参集した大勢の方々に感謝の挨拶をなさいました。そして帰りには一同に先生がお書きになった色紙をくださいました。それには、「感謝」と書かれています。一方、私は早川社長からも生前お書きになった色紙をいただき、それにも感謝とあります。そして教えられた事を思い出しています。それは「感謝」は単に幸せな結果に対応するものではなく、むしろ積極的にそれに向かって行動せよという事でした。

私はあの時の高柳先生の「皆様の御陰によりまして...」という御挨拶を聞きながら、感謝のできる行動を後へ続く者に教えて下さったものと思っております。

笹尾三郎 記

(2004年4月・秋工同窓会関西支部調査編集)

出典:「秋工百年誌」

◆ 記事

赤川 均 (昭和41年電気科卒)